

Title	アダム・スミス書誌
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.9 (1940. 9) ,p.1297(117)- 1332(152)
JaLC DOI	10.14991/001.19400901-0117
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400901-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミス書誌

三邊清一郎

近世經濟學の父アダム・スミスがエデンプラの自邸パンミア・ハウスにその榮えある生涯を終つたのは、一七九〇年七月十七日である。慶應義塾大學經濟學部、理財學會及び圖書館ではこれを紀念して六月十七日より六日間「アダム・スミス歿後百五十年紀念展覽會」を開催した。本文は、高橋誠一郎教授指導の下に直接同展覽會陳列の衝に當つた筆者が、その準備のため筆を執つたものである。

アダム・スミス最後の日は、小泉信三博士の筆によつて、次のやうに叙述されて居る。——
一七九〇年の春、スミスは自ら餘命の久しからざることを感じた。此時彼れの心を煩すものは其原稿の處置であつた。彼は其中公刊に堪へると認めた若干のものを除くの外舉げて之を破棄せんと欲し、此事を其親友ブラック及びハットンの二人に托したが、猶ほ安するに至らず、七月の或日態々二人を呼んで、即座に原稿十六卷を焼却せんことを請ひ、二人は其内容を知らず、また之を問ふこともしないで依頼の通りを實行した。スミスは非常に安心して、それが多分日曜であつたのであらう、例に依て友人が來訪すると、スミスは猶ほ出て客に接する丈の元氣があつた。併し友人等に促されて彼れは九時半頃中座して寢室に退いた。其時スミスは別を告げて、「吾々は此會合を別

の場所に移さなければならぬ』と言つたとハットン⁽¹⁾は傳へてゐる。……スミス邸の日曜日の夜食會はこれが最後であつた。超えて約一週間、一七九〇年七月十七日の土曜日にアダム・スミスは六十七歳を以つて逝き、遺骸はスミス邸から程近きキヤノン・ゲートの墓地に葬られた。^(同博士「アダム・スミス、マルサス、リ」カアドオ。昭和九年二〇四―〇五頁。)

彼の死後を偲んで描く書誌には、この焼却された原稿から筆を起すのが相應しいであらう。私はこの文章を読むとき、ラフカディオ・ハーンの小篇「葬られた秘密」を想ひ出さざるを得ない。ここでは讀んだ人だけが知る秘事が物語られて居る。ここでは書いた人だけが知る秘密が話されて居る。一體この校書によつて何が失はれたのであらうか。それは彼の「最も親しい友人にすら知られなかつたものであり、様々に憶測されて居る。スミスが倫理學教授として初めてグラスゴウ大學に迎へられた時、彼は學生の注意を、教科書風な論理學、心理學よりも、もつと興味ある有益な研究に向ける必要があることを知り、心の力を概観し、推論の技術的方法に關して好奇心を満足させるに必要だけ古代論理學を説明した後、殘餘の時間は悉く修辭學及び美文學大系の教授に當てた。そして「この問題に關するスミス氏の講義を含む草稿が、氏の逝去前に破棄されたのは甚だ残念である。最初の部分は構想の點に於いて完成に近いものであり、全體は趣味と獨創の特徴の強いものであつた」といふのが、彼のグラスゴウ大學に於ける學生で後にその同僚となつたジョン・ミラーの回想である^(Dugald Stewart: Account of the life and writings of Adam Smith. Ll. D. in "Essays on philosophical subjects. By Adam Smith." 1795. p. xvi.)。躬ら焼却の任に當つたハットン⁽²⁾は「講義の全卷の處分を托されたと言ひ^(Ibid. p. lxxxviii.)」ステュアートは「その中に一七四八年エデヤンバラで朗讀した修辭學の文章、グラスゴウに於ける彼の課程の一部を構成した自然宗教及び法學に關する講義があつたことは疑ひない」とし^(Ibid. p.)。またボナーは「法律及び政治の一般的原理の説明」、法學及び自然法の理論及びその歴史に關する草稿があつたらうと推測して居る^{(James Bonar}

A catalogue of the library of Adam Smith. 1894. p. xiii. 2. ed. 1932. p. xv.)

スミスが自分の手で公にしたものは「道德情操論」(一七五九年)と「國富論」(一七七六年)だけである。しかし彼にはこの外に猶ほ大規模の著述の計畫があつた^(後述)。それ等に就いて幾多の原稿の草せられるものがあつたであらうことは、容易に想像されるだらう。彼は一七七三年の春國富論の原稿を携へて倫敦に上つた時、親友ヒームに宛て、次のやうに書いた。

「予は予の一切の原稿の管理を君に託せるが故に、予が自ら携帯するものの外は、降つてデカルトの時に至る迄相次いで行はれたる天文學の諸體系の歴史を含む大なる著述の一断片を除けば、一も出版に値するものなきを告げねばならぬ。此を青年時代に計畫せられたる著作の一断片として出版すべきや否や、予自ら其或部分には堅實よりも多くの洗練あることを疑ひかけてゐる者ではあるが、そは一に全く君の判断に委する。此小著作を君は予の書齋の書き物机の中の薄き二つ折紙本中に見出すであらう。此机の中、若しくは予の寢室に立てる机の玻璃製開き戸の中に見出さるべき一切の他の無綴の原稿、及び同じく同じ玻璃戸中に見出さるべき約十八冊の薄き二折本は、何れも吟味することなしに破棄せられんことを欲する。^(四月六日。小泉博士、前掲書、一〇七―一〇八頁。)

こんな手紙が書かれたのは、彼が國富論著述の勞作に甚しい心身の衰へを感じ、突然の死を豫想したからに外ならないが、しかし彼は猶ほ長く生き、國富論を躬らの手で出版した丈でなく、自著の著しい改訂にも従つたのである。他の草稿に就いては友人によつてこの様に言はれた。スミス博士はいま(一七八一年)その道德情操論並びに國富論の改訂に従事しつゝある。この新版では著しい變更と改良が行はれるだらう。「彼は批評及び文學上の問題に關する論文を、あるものは完成し、しかし大部分は全く完成されないで、側らにもつて居る。彼がそれを世に贈るこ

とを考へる日には、彼はそれによつて著者としての彼の従來の名聲を損ふことはあるまいと信ずる。(William Robertson Smith as student and professor, Glasgow, 1937, p. 284.) 彼自身も一七八〇年に丁抹の二友人に近況を報じて、私の現在の地位は全く恵まれたものである。唯々残念なのは職務により文筆が妨げられることである。「私が豫ねて計畫する數個の著述は、そひでない場合よりも遙かに遅らされる模様である。」と書き (Ibid. p. 284.) また晩年リデルに、自分は殆んど何もして居ない。しかし「もつとして置きたかつた。私の原稿の中には大へん利用できる材料があるのだが、しかしそれも今となつては問題でない」と歎じたと傳へられる (Essays, p. 130xxxix.)

彼が夙くから未定稿の破棄を志したことは前に述べた。彼のこの素志は終始易るところがなかつたものである。一七八七年後の最後の發病の少し前倫敦に上つた時にも友人に彼死去の際は講義の全卷は破棄し、爾餘の草稿はその好むところに従つて處置されたい旨委嘱したといふことである (Essays, p. 130xxxviii note.) 彼がかやうに未完成の原稿の破棄を執拗に固執したには、或はその發表は既得の名聲を害するといふ、當時の知識人の間に行はれた通念が働いて居たのかも知れない。(註)しかし私は、重要な議論に公平でないため、眞理を促進するよりも寧ろこれを阻害しないかといふ懸念が、幾多の著者をしてその極めて貴重な未完成の勞作を世に問ふことを控へさせた。彼の場合も一にはかゝる學者的良心からであらうとするステュアートに同意する。(Essays, p. 130xxxviii)

(註) ジョン・ミリアがスミスの後嗣ダグラスから後事を相談された手紙の返事に次のやうに書いて居る。「若しもそれ等の草稿が完成して居なかつたとすれば、その公表を差控へるのが正しい。蓋し既に高い名聲を得た著者は、新しい出版で失ふところが多く、得るところは殆んどないからである。誰れでも人はいゝ本を一冊書くことは骨折を儲けるだけだと考へる。然るに彼が死ぬと、第一の著作が幸せなヒットとなるのである。ジョン・ヒュームが、ダグラス

スの外筆を執らなかつたとしたら、仕合せだつたらう」と。(W. R. Scott: Adam Smith, p. 312.) しかし彼自身はスミスの手稿の焼却を最も惜しむ一人であつたのである。「しかし私は決してスミス氏の手稿が同じ考へを件ふものと思ふのでない。寔に私はその反對であることを知つて居る。それ等に恐らくより不正確、若しくは少くとも構造に於いて少しく劣るところがあつたのであらうが、天才——最高級の天才——の同一特徴を具へて居たことであらう。」(Ibid., p. 312.)

この焼却を免れた諸稿は、彼の生涯を記念して、一七九五年ジョン・シップ・ブラック及びジェームス・ハットンの手で——ヘンリ・マッケンジーもこれを扶けた——編輯公刊された。(註一)「哲學問題諸論文」Essays on philosophical subjects. By the late Adam Smith, LL. D. Fellow of the Royal Societies of London and Edinburgh, etc. To which is prefixed, an account of the life and writings of the author; by Dugald Stewart, F. R. S. E. London: for T. Cadell Jun. and W. Davies (successors to Mr. Cadell) in the Strand; and W. Creech, Edinburgh, 1795. がすなはちこれである。この遺稿編纂の企は彼の死の直後その遺族、友人間に考慮されたものらしい。一七九〇年八月十日にジョン・ミリアはダグラスに宛て、「スミス氏の文章が一日の目を見ることがなるらしいと聞くのは欣ばしい。——といふのは、私は貴君や顧問達がこの方面に全幅の力を用ひられることを希望するからである」と書き居る (W. R. Scott: Adam Smith, p. 312.) (註二) また出版上の具體的経緯を示すものとして、一七九二年十二月(二十)出版者カデルがマッケンジーに宛てた次の手紙が残つて居る。「十二日附書簡は正に落手、スミス氏の遺稿に就いて私の前便が御手許に届いて居ないことを知つて大へん驚いて居ます——それは貴君の第二の手紙の返事として八月三十一日イーストバサンから書いたものです。文學的著作に價値を置かないのがストラアン氏及び私の永い間の

既定の方針です、——私達は著者の申出を受け、それからその申入れが受諾できるかどうか判定するのです、——しかしこの場合私共が、貴君の御考へに對して次の申込をするのは、スミス氏の追憶に對する吾々の敬意であり、貴君に對する信頼からです。すなはち初版は四折版で一千部を印刷し、私共はそれに對して三百磅を支拂ふ、そしてこの本が再版に附せられる場合には私共は更に三百磅を支拂ふことを承諾します。(Ibid., p. 314)

(註一) フラック Joseph Black 及びハットン James Hutton はそれ／＼當時に於いて勝れた化學者及び地理學者である。後者には「地球論」Theory of the earth, 1795. の著がある。「學燈」昭和十四年九月號一七頁レエはこの二人を、スミスと共に「近代化學、近代地理學、及び近代經濟學の父と呼んで、人達だと言つて居る。彼等はスミスとは毎金曜日

エデキンバラの料亭で午餐と共にする間柄であつた。この二人はまたスミスの遺言執行人となつた(John Rae: Life of Adam Smith, 1895. p. 334-37; Essays. p. xciv.)。フヘンント Henry Mackenzie によつて The man of feeling の著がある。スミスが最後の日曜日の晚餐會を退く際残した「紳士諸君、私は諸君との交際を愛する、然しながら私はあの世へ赴くが爲めに諸君とお別れしなければならぬと思ふ」といふ言葉を傳へて居るのは彼である(高橋誠一郎教授著「經濟思想史隨筆」昭和十五年、一六五頁)。

(註二) 一七九〇年八月十四日D. グラス宛ラッバラ卿書簡参照。(W. R. Scott: Adam Smith, p. 313)

この論文集には、天文學の歴史、古代物理學の歴史、古代論理學及び形而上學の歴史によつて例示せられる「哲學的研究を嚮導指示する諸原理」に關する三論文、及び「所謂模倣藝術に行はるゝ模倣の本質」、「音樂舞踏及び詩歌の類同」、及び「五官」を論ずる三篇が收められて居る。その大部分は、編者の言ふやうに、「彼が嘗て立案した、高等諸科學及び優美なる諸藝術の連絡ある歴史を書かうとする計畫の諸部分を成す」ものゝやうである。この計畫は久しい以前に廣汎に失するものとして放棄されたのであつたが、これ等の部分はその長逝に至るまで例に横へられ、

死の直前公表に適せずと考へる諸稿を破棄させた際に、「その適當と認めるところに従つて處理するやう友人の手に残した」ものである(Essays, Advertisement)。そのうち天文學の歴史と模倣藝術に關するものは、特に彼の期待するものであつた。これに就いてラッバラ卿は次のやうに書いて居る「氏の未刊諸著述の處置は、氏からその大部分破棄する心算りだと聞かされて居たのだから、正に私の豫ねて期するところである。しかし天文學の歴史とその模倣藝術に關する論文には、氏は特に期待を懸けて居た。後者は私は氏が倫敦に居た際に見た、しかし爾來若干變更を加へられて居ることと思ふ。前者は長く見ない。しかし氏の談話から氏がその訂正に従つて居たことは知つて居る。(W. R. Scott: Adam Smith) 殊に天文學の歴史に關する論文は、編者によつてその殘された形態に就いて「著者がこの論文の終りに p. 313. 若干のノートと覺書を殘して居ることから、彼がこの天文學の歴史の最後の部分は不完全で、數箇の追加を必要とする」と考へたことが明かである」と言はれて居るけれども(Essays, p. 93.) 彼自身によつては夙くから「出版に價する」唯一のものとして考へられたことは、前掲一七七三年のヒューム宛書簡によつても明かである。この論文はその末尾に於いて「一七五八年に出現すべき」慧星に觸れて居ることから、それ以前に執筆されたものであることが推測されて居る(Ibid., p. 90. and note).

模倣藝術に關する論文は、もとグラスゴウ文學會講演(註一)のために準備せられたのである。しかしその際完成されたのは最初の二部だけであつて、舞踊を取扱ふ第三部は完了されなかつた。「彼は模倣藝術に就いて企てた論文の二つをグラスゴウに於ける吾々の會のために講讀した。しかし第三部はその時完成して居なかつた。私はいまそれが出來上つておれば」と思ふ。(W. R. Scott: Adam Smith, p. 312) 彼自身は、一七七六年國富論公刊後、税關管理官任命に至る時期に於いて再びこれを取上げたことを言つて居る。(註二)レエが滯佛時代の劇場の見聞がこの間

題に關し彼は幾多の省察の資料を與へたと見て居るのは、恐らく當つて居るだらう (J. Rae: Life of Adam). 本論文は現存の状態では猶ほ結論を缺くのであるが、ステュアートは、それは吾々が模倣藝術から享ける快感を、主として模倣の困難すなはち「克服されたる困難」 difficulté surmontée によつて説明することを目的とするものだと云つて居る (p. lviii).

(註一) グラスゴウ文學會 Literary Society of Glasgow は一七五二年に主としてその大學教授を會員として創立された。スミスもその會員及び創立者であつた。彼はこの外この會で一七五二年一月二十三日にヒュームの貿易論に就いて講演した (J. Rae: Adam Smith, p. 95; W. R. Scott: Adam Smith, p. 32; 312.)。

(註二) 一七八〇年十月 A. ホルト宛書簡: 「其後(一七七三年春以後)四年間倫敦が私の主な住居であつた。そこで私の著作(國富論)を仕上げ上梓した。私はカウウェイの舊閑居に歸り、模倣藝術に關する他の一篇の執筆に従つて居たが、その時にバックルウ公爵の關係で現在の職に任命された。」 (W. R. Scott: Adam Smith, p. 283.)

天文學、古代物理學、論理學及び形而上學の歴史によつて例示せらるゝ哲學的研究を嚮導指示する諸原理の三篇は、本文集の編者が天文學のそれに就いて言つて居るやうに、主として「スミス氏が哲學的研究の一般的動因たることを指摘したかの人心の諸原理の附加」として見るべきであらうが (Essays, p. 93) しかしてこの計畫がいつの日に企てられたのか知ることが出来ない。ステュアートは、物理學に關する論文が彼の「最も夙い著作の」のであること、また焼却を免れた少數原稿の「一であることを言つて居るけれども (Essays, p. xliii) 殘存するもの、最初なのか、彼の有ゆる述作の最も夙いものなのか、彼の言葉では明かでない。スコットはこれ等はグラスゴウ教授時代の前半に筆を執られたと見るのが蓋然性が高いとして居る (W. R. Scott: Adam Smith, p. 50-51) 彼はまた同じ箇所及び他の箇所を「英吉利及

び伊太利韻文の類同」——その初期の形態を示す草稿の一部が彼によつて複製されて居る——が恐らくこの時代以前に廻り得ないこと、及び「五官に就いて」がこの時期に書かれたらしいことを、想像若しくは推論して居る (Ibid., p. 80.) 本書には前記倫敦版の外に、ダブリン版(一七九五年)、ストラスバーグ版(一七九九年)、バーゼル版(一七九九年)及び雑版(倫敦一八六九年)がある。また本論文集は一七九七年に P. プレヴォストによつて佛蘭西語に移された。Essai philosophiques; Par feu Adam Smith... Précédés d'un précis de sa vie et de ses écrits; par Dugald Stewart... Traduits de l'anglais par P. Prevost Paris, 1797. がこれである。

二

彼は一般に「エデキンバラ評論」に寄せた匿名の二篇を以つて著作家として文學界にデビューしたものとされて居る (J. R. McCulloch: Sketch of the life of Dr. Smith.) しかしてこれに先つてなほ彼の筆に成るものと見做さるゝ一文がある。すなはち亡命詩人ウキリアム・ハンミルトン William Hamilton of Bangour の詩集の序文がこれである。ハンミルトンはジャコバイトに好まれた「グラズミアの戦ひ」の頌歌「Ade to the Battle of Gladsnuir」を書き名聲を馳せたが、またそれが爲めに國を追はれた蘇蘭詩人である。友人等は彼のために詩集の出版を計畫し、その編輯をスミスに依頼した。後年の哲學者、經濟學者にこの事のあるのは、一見異とせられるかも知れないが、前節に述べたやうに彼自身に文學的著作があり、エデキンバラに於いて文學講演をなし、且つその青年時代に詩人たらんと考へたと稱せられることを思ふならば不思議とするに足らな (J. Rae: Life of Adam) 「折々の詩」 Poems on several occasions と題せられたこの詩集には、一七四九年のグラスゴウ初版と一七六〇年のエデキンバラ増訂第二版があり、その第一版序文はこの大哲學者の筆に成り、第二版のそれは確かに彼の文體だとされて居るのである

(Charles J. Bullock, an Essay by, In "The Vanderblue".) 彼はジョン・トリンプル卿が後者の献辭をスミスに書かせるやうに出版書肆に言ひ送つた手紙を引して居る (J. Rae: Life of Adam).
Smith. p. 40.

けれども一般に確かなものとしては、前述の「エドモンド・キンバラ評論」に寄せられた匿名の二篇が處女作とされる。しかしこゝに言ふ「エドモンド・キンバラ評論」は、一八〇二年 F. シェフレエ、H. フロオガム及び S. スミスによつて復活され、一九二九年まで継続した第二次「評論」ではなす (Ch. J. Sawyer & F. J. Harvey Darton: English books 1475-1900. rican Literature, ed. by). それは一七五五—一七五六年に發行された第一次「エドモンド・キンバラ評論」Edinburgh. Review. Edinburgh. G. Hamilton and J. Balfour. Jan. 1755-Jan. 1756. 8vo. Semi-annual publication. である。蘇蘭に於ける「文化の進歩状態を時々世間に知らす」目的をもつて、A. ウェッダーバーン Alexander Wedderburn、H. ブレーア Hugh Blair、D. ジョージアグイン Dr. Jardine、アダム・スミス及びロバートソン教授 Professor Robertson の若人達の間に創刊された文學評論雜誌である。それは主に發刊に先づ六ヶ月間に蘇蘭で印刷された書物の紹介を載せる筈であつたが、一七五五年の一月六月に對する第一號と一七五五年七月—一七五六年一月に至る第二號の發行を見ただけで廢刊となつた。 (Mary Elizabeth Craig: The Scottish periodical press, 1750-1789, p. 31, 99. (註)
Bibliography, by John P. Anderson. In "Adam Smith" by R. B. Haldane, p. 1.)

スミスはこの雜誌の第一號に「サミュエル・ジョンソンの英語辭書の批評 A dictionary of the English language, by Samuel Johnson, A. M., pp. 61-73, を第二號には「評論の範圍を擴張すべきことを提議する編輯者宛書簡 A letter to the authors of the Edinburgh review. pp. 63-97 を寄せた (James Bonar: A catalogue of the library of Haldane: Life of Adam Smith, 1887. Bibliography, by J. P. Andersson.)」ジョンソン博士の「英語辭典」A dictionary of p. 1: The Vanderblue memorial collection of Smithiana. p. 48. ショーン博士の「英語辭典」A dictionary of the English language: in which the words are deduced from their originals, and illustrated in their different

significations by examples from the best writers. To which are prefixed, a history of the language, and an English grammar. vols 2. London, 1755 は「今日の英語の意義が初めて確定された時代に文壇の耆宿の手によつて編輯されたといふ意味で、モニメンタルな大著と稱せられるものである。スミスは前の寄稿でこの辭書の價值を認め、たゞ若し著者が是認せられない用語を更に多く非難し、また單に一語の數意義を列記するに止めないで、これに等級を分ち、主たる意義と従たる意義とを區別したならば一層改善を見たであらうと評し、自ら wit と humour の二語をとつて模範を書き、その言はうとするところを例示した。但しジョンソンは後の版でこの批評を顧みて居らぬといふことである (小泉博士前稿、
楊書五三頁)。

第二の寄稿は、第二號附録として發表された。本稿では蘇蘭に於いて文學的著作の公にせられるものが猶ほ尠いから、「評論」の範圍を廣めて宜しく重要外國文献にも及ぼすべきであると主張した。彼はこれに續いて當時の大陸文學を批評し、英佛文學の比較を試みた。彼れに據れば、伊太利は已に文學を生むことを罷め、獨逸は科學を生産する丈で、當時大陸文學とは彼れにとつては佛蘭西文學に外ならなかつた。彼は詩から哲學に移り、佛蘭西のアンシクロペヂストは自國のカアテシヤンの體系を捨て、英國のベエコン、ニュートンの體系を取り、しかも英國人自身よりもより一層有効にこの體系を説明して居ることを知つた。かくて佛蘭西の大百科全書を可なり詳論した後、ピュフオン伯、レオミウルの科學上の近業を紹介し、哲學書では當時恰も公にされたルソオの「人間不平等起源論」を紹介した。彼は本書の要旨を摘要、その數節を譯出し、ルソオはその文章の助けに依り、又少許の哲學的化學と相俟つて、「放縱なるマンドゥールの原理と觀念をして一切のプラトオ道德の純正と率直とを有せしめ、且つ眞實の共和主義精神の稍々度を過ぎたものに外ならざるの觀あらしめた」と評して居る (小泉博士前稿書、五三一—五四頁。J. Rae: Life of Adam Smith, p. 122-24; M. E. Craig:

Scottish periodical press)°
1750-1789; 1931. p. 32.)

(註) 廢刊の事情は「エの「スミス傳」二二四—二五頁に詳しい。この雑誌はスミス文獻中最も入手し難きものの一である。スミス文獻の蒐集家であつたツァンダブリーは、その一部を所有することは蒐集家にスリルを興へると言つて居る (Homer B. Vanderjue: Adam Smith and the "Wealth of Nations." A adventure in book-collecting and a bibliography. 1936. p. 3.)。本誌の所在に就いては、大英博物館、国立蘇格蘭圖書館に第一—二號、エデキンバラ公衆圖書館に第一號が保存されて居ることが報せられて居る。(The Scottish periodical press. p. 99.)

本誌は一八一八年「マッキントッシュ」が解説と主要寄稿家の名を附して第二次「評論」の形に模して再版を作つた (John Rae: Life of Adam Smith. p. 124; Bibliography, by J. P. Anderson. p. 1.)。この再版も可なり妙いものと思はれ、筆者の知る限りでは、米國議院圖書館、ニューヨーク圖書館、北カロライナ大學圖書館に第一號複製、ニューヨーク公衆圖書館及びフィラデルフィア圖書館會社に複製が藏せられて居ることを知るばかりである (The Scottish periodical press. p. 99.)

猶ほこの外にこの頃に執筆され、しかも一旦はかの死直前に於ける焼却を免れたが、しかし後に至つて等しく同じ運命に失はれた一草稿の存在が傳へられて居る。それは一七五五年グラスゴウのコクレーン俱樂部 (Cochrane's Club) で講演した草稿であつて (W. R. Scott: Adam) 一七九三年一月(二十八日)及び三月(十八日)にダッガアド・ステュアートが王立エデキンバラ協會 Royal Society of Edinburgh でスミスの業績に就いて講演を行つた際に、佛蘭西經濟學者の著作に對し、その「商業及び産業の自由に關する所説」の獨創性を立證するために紹介したものである (Essays. p. lxxvii.)。それはスミスが一七五〇—五一年にエデキンバラで試みた法學講演 (註一) の内容と、その頃すなはち

彼の利用し得る佛蘭西の著述の存在しなかつた以前に於いて、既に經濟的自由主義を主張したことを示すものとして (小泉博士前掲)、また富の進歩の遲滞と、若しも事物の自然的經路の作用を自由に許すならば發生する状態とを對比する、國富論第三編「諸國民に於ける富裕の進歩の差異に就いて」の淵源を成すものとして重要である (W. R. Scott: Adam Smith.)。p. 56.)

「人間は政治家及び企業家に依て一般に一種の政治的機械の材料と見られてゐる。企業家は人事に於ける自然の作用の經路を妨げる。而かも自然をして其自らの設計を確立せしむるには之を放任し、其目的の追求に於て自然に對してフェアプレイを興へる以外の事は必要でなく。」

「國家を最低度の野蠻より最高度の富有に導き到らしめる爲めには、平和と輕易なる租税と相當の程度の司法行政と以外には必要なものは殆ど無い。爾餘一切のことは事物の自然的經路に依て齎される。此の自然的經路を妨げ、強いて之をして別の通路に往かしめ、又は特定點に於いて社會の進歩を阻止せんとする一切の政府は不自然であつて、己れ自身を支へんが爲めには必ず抑壓的壓制的となることを餘儀なくされる。」

「本稿に列記せる意見の大部分は、今猶予の手許に存する若干の講義の草稿にして、六年前予の許を去つた一書記の手跡を以て書かれたもの、中に詳細に論ぜられてゐる。それは皆な予がグラスゴウで過ごした最初の冬に始めてクレエギイ氏の學級に授業した時以來、今日に至るまで何等重要な變更なく、常に予の講義の主題たり來りしものである。それは皆な予がエデキンバラを去る前の冬に彼地に於て試みた講義の主題であつたもので、予は彼の地からも此地からも、彼の諸説が予のものであることを十分確證すべき無数の證人を擧示することが出来る。」 (小泉博士前掲書、二) 六一—二七頁)

これがステュアートによつて傳へられる草稿の内容の全部である。スミスが如何なる事情の下にかゝる一文を綴つたのか、明かでない。ステュアートは「ある主要政治的及び文學的原理」に對する剽竊を懸念して、彼の排他的權利の確立を望んだのだ」と言つて居る (Essays, p. lxxx.)。そしてこの剽竊の可能性あるものとしては、ボナーその他によつてフアグスン及びロバートソンが擧げられて居る (W. R. Scott: Adam Smith, p. 101, 118-20.)。或はブリーアも加へられるかも知れない。しかしそれ等はいつれも確實でない。これに就いては恐らく、この時代の冊子をより以上に研究するものが、一層よき解答を與へることが出来るだらうと、解決を將來に期するケーンズの見解が寧ろ當つて居るだらう (J. M. Keynes: Adam Smith as student and professor, in "Economic History," Feb., 1938, p. 43-45, cf. J. Rae: Adam Smith, p. 63-65.)。

この原稿はステュアートが前記講演を爲した時には、現在彼の所有に在つたのであつた。唯々一部協會員にも知られる理由により「本草稿の出版によつて私的不和の記憶を新たにするのは宜しくなう」と考へるので、その全文の發表を差控へたのだと言ふ (Essays, p. lxxx.)。彼はその後にも一二の機會にスミスの草稿に觸れて在る。その一は彼のエデンプラ大學の經濟學講義に於いてであつて (註二)、そこでは、スミスの價格の地代、賃銀及び資本利潤への分割が、ジェームズ・オスワルトの示唆に由るものであることが、「現に私の所有に在るスミスの草稿によつて明かである旨を指摘して居る。」 (Dugald Stewart: Lectures of political economy. In "Collected works.")。他は「スミス傳」の後の版 (Biographical memoirs, of Adam Smith, LL. D. of William Robertson, D. D. and Thomas Reid, D. D. read before the Royal Society of Edinburgh. Now collected into one volume, with some additional notes. Edinburgh, 1811.)に於いて、彼が「以前に精讀したスミス氏の文章」中に述べられて居る様子からオスワルトの學風を説明して居る場合である (p. 121.)。私はこれ等を、それと同一組のものとして考へるのであるが、それは彼の子のメテ

アート大佐が數學に關する文書をユナイテッド・サービス・クラブ (United Service Club) へ寄附した残りのものをすつかり焼いたといふ事實から、失はれたものと信ぜられて居る (W. R. Scott: Adam Smith, p. 117, 120; John Rae: p. 26. Cf. Dugald Stewart, Collected Works of, vol. viii, p. x.)。

(註一) この講演は、彼が「一七四八年とそれに續ぐ二年」(A. E. Naiton: W. R. Scott: Adam Smith, p. 50)に行つた一聯の公開講演の最終の一部であつて、その草稿は彼の言葉から一七四九年の恐らく夏に作られたのだらうと想像される (Essays, p. lxxx; W. R. Scott: Adam Smith, p. 51.)。それは従來經濟學講義と考へられたが (J. Rae: Adam Smith, p. 36.)、しかしエデンプラ講演のこの最後の部分を聽講したジョン・カランダー (John Callander) が「アダム・スミスは法學生に市民法を教へた。彼がこゝで與へた講義は、のやうなものであつた」と言つて居ることから、エデンプラの最終課程が主として哲學的でなく、また經濟學的でもなく、法律哲學の性質をもつ或物、若しくは其頃「法學」"Jurisprudence"——今日よりも廣い意味に用ひられた言葉——と呼ばれたものに關したことが考證されて居る (W. R. Scott: Adam Smith, p. 54-55.)。

(註二) スチュアートが經濟學を政治學から分離して講義を初めたのは「一八〇〇年の冬まで」(Works, vol. x, p. xviii, cf. p. xvi-xlix.)。本講義は主として現世紀の初めにまで遡つて書かれたものに、一八〇九—一〇年——ステュアート氏の大學に於ける勤務の最後の年——までに折に觸れて挿入された増補訂正から成つて居る。(W. ハミルトン。Ibid., vol. viii, p. vii.)。

以上は總てグラスゴウ大學教授時代に筆を執られたものに就いて述べたのであるが、W. R. スコットの近業「學生及び教授としてのアダム・スミス」(William Robert Scott: Adam Smith as student and professor. With unpublished documents, including parts of the "Edinburgh Lectures, a draft of the Wealth of nations, extracts from

muniments of the Glasgow and correspondence. 1937. にエディンバラ時代に書かれたと思はれる草稿の四断片の發見を報告して居る(P. 57)。これ等はスミスが保存した手紙の中から發見されたのである。彼の未完成諸稿が死の直前破棄されたことは既に述べた。これ等はある時々、その在るべき場所から移動されて居たため焼却を免れたのだらうと想像される。これを法學講義の順序に當嵌めるならば、第一はグラスゴウ講義(後)の家族法及び私法に關する章の序論に相當する。(註)第二のものは、古代よりジェームズ五世逝去に至る蘇蘭に於ける穀物及び家畜等の價格」と題せられて居て、講演には不適當かとも考へられる。或は彼の研究用の手控であつたかも知れない。スコットはこれだけはもつと後に書かれたものかも知れぬと考證して居る(P. 265, note 4)。第三及び第四は分業及び水陸運送を取扱つて居る。殊に哲學者と運搬夫の例を以つて始まる最初のものはハチスンとグラスゴウ講義の中間を往くものであつて、その師の所説に従ひつゝこれを踏み越ゆる彼の進歩が示され、また分業の「本質」を分析して當時既に抱懷した彼の經濟思想の一端を表はし、その思想史研究上極めて重要な文献たることを示して居る。

(註) 『道徳情操論』第六版に至つて初めて省かれた贖罪に關する文章がこの一片に僅かの差異を以つて記されて居るので、それは一八三一年にアリストートルの著作中から發見されたといふ(Rae: Life. p. 429) 道徳情操論の草稿断片でないかと疑はれて居る(W. R. Scott: Adam Smith. p. 58, note 2)。

三

アダム・スミスは一七五一年グラスゴウ大學の論理學教授に選任され、續いて道徳哲學の講座の擔任を命ぜられた。しかし論理學の講義は一年だけで、第二年からは道徳哲學のみが講ぜられた。彼がこゝでどんな講義を行つたか。彼の夙い頃の弟子であり、後にグラスゴウ大學の同僚となつたジョン・ミラー(註)の話が傳へられて居る。これ

は屢々の機會に紹介されて居るけれども、しかし彼の全思想體系に於けるその著作の位置を知るために必要であるから、次に引用して置かう。

「スミス氏は論理學の教授に任命されてから一年ほど経つた頃、道徳哲學の講座に選任された。この問題に關する氏の講義の課程は四部に分れて居た。第一は神學を含んで居た。ここでは神の存在と諸屬性の證明及び宗教の基礎となる人心の諸原理を考察した。第二は嚴格な意味での倫理學で、後に主として彼がその道徳情操論で公にした諸學說から成立つて居た。第三部では道徳の中正義に關し、且つ精緻にして正確な規則を受容れるので、その故に充分且つ精細な説明をなし得る部門をより詳しく取扱つた。この問題に就いて、氏はモンテスキューによつて暗示されたと思はれる計畫に従つて、最も粗野な時代から最も開化せる時代に至るまでの公私兩法制的漸次に進歩せる跡を辿り、かの生活及び財産の蓄積に貢獻する技術が法律及び政府の上に、それに相應する進歩と變革とを生ずる効果を指摘するに努めた。氏はその勞作のこの重要な部門をも同じく世間に發表する積りであつたが、道徳情操論の結末に記されたこの意圖は、遂に之を遂行するに及ばずして逝去した。この講義の最後の部分では、正義の原則を基礎となさず、便宜の原則に基づき、一國家の富と力と繁榮とを増進せしむることを目的とするかの政治的諸規制を吟味した。この見地の下に、氏は商業財政宗教並に軍事的施設に關する政治的諸制度を考察した。」(Essays. P. xvii-xviii. 主として小泉博士前掲書譯文に據る。)

(註) ミラーは既にエディンバラ講演の聽講者の一人であり(W. R. Scott: Adam Smith. p. 63, 85) スミスが一七五一年グラスゴウ大學に迎へられた時には大學の課程を了へて居ただけけれども、再び彼の講義を聞いたのだと傳へられる(J. Rae: Adam Smith. p. 43)。

講義の第一部に對してはスミスは特に興味を感じなかつたらしく、この部分に就いては今日何も残つて居ない。またスミスに之れを著作で發表する計畫のあつたことも傳へられて居らない。第二部の倫理學に就いては一七五九年に道徳情操論が公にされ、その最後の部分で「別の一論稿に於いて、吾に正義に關する事項のみならず、また、警察、收入、並びに軍備、及び苟も法律の對象たるべき爾餘一切のものに關する事項に於て、法律及び政治の一般原則とその社會の種々なる時期時代に於いて闡した様々の變革とを記述せんと試みる」ことを約束した(Adam Smith: *Moral sentiment*, 1759, p. 551, 小)。こゝに警察とは、政治の下級部分の制規を構成する「清潔と安固」並びに「低廉即ち豊富」を指すのゆゑ(Adam Smith: *Lectures on justice, police, revenue*)。この約束は一部果された。すなはち「諸國民の富の本質と原因に關する研究」に於いて「少くもその警察、收入及び軍備に關する限り履行した」のである(Adam Smith: *Moral Sentiment*, 6. ed., p. vi)。他の一部分すなはち法學論及び政治論に就いては、彼は三十餘年後その歿年に至つて道徳情操論第六版を出したときに、その序文で「残る所のもの、即ち私が久しく計畫した法學論は今日まで本書の訂正を妨げた職務のためにその履行を妨げられた。私は既に老ひ、果してこの大著述を自分が満足するやう遂行し得るや否や甚だ覺束ないけれども、しかし私は全然この計畫を放棄したのでなく、猶ほ出来る丈けのことを續けてゆきたいと考へて居るのであるから、私のこの言葉を、三十餘年前その表明する總てのことを實行し得るに就いて些かも疑ひを懷かなかつた時の儘に残して置く次第である」と言つて居る(Moral sentiment)。この「全然この計畫を放棄したのでなく」といふのは事實であつた。それは一七八〇年十月A・ホルトに宛て、「私の現在の地位(税關監理官)は私の望み得る限り恵まれたものである。唯々一つの残念なのは文筆の仕事が妨げられることであるが、これは職務上止むを得ない。私が豫ねて計畫する數個の著述は、そうでない場合よりも遙かに遅らされる模様である」と近況を報じて居

るによつても知られる(W. R. Scott: Adam)。しかしこの計畫は遂に實現されなかつた。ステュアートはスミスが税關監理官に就任したことを、彼の職務は殆んど思考力を働かすことを必要としなかつたけれども、しかもその精力を費し、その注意を頒つに足つた。「だから彼の生涯が閉ざられた今日、それがもつと世に有益な、もつとその叡智に匹敵した仕事に用ひられなかつたことを悲しむことなくして、それ等が費した時間を回顧しない譯にいかない。彼がこの市(エデキンバラ)に移り住んだ最初の一年間は、彼の研究は全く妨げられたやうに思はれ、彼の學問に對する熱情は彼の餘暇を楽しみ、その會話を生氣あるものにするに役立つた丈けであつた。彼が極めて早く感じ初めた齡の衰へは、遂に彼をして猶ほ世と彼自身の名聲に負ふところあるを氣付かせたけれども、その時には既に遅かつた。彼が公約した著作の主要材料は既に久しきに亘つて蒐集され、彼が常に試みたかの組織的排列をこれに與ふるためには、極めて少數年月の健康と餘暇とを缺いたに過ぎなかつたらう」と残念がつて居る(Essays, p. lxxxvi)。かくて吾々は彼の二大著「道徳情操論」及び「國富論」が彼の思想體系の中に占める地位を知るのである。けれども彼が教場に於いて行つた講義そのものに就いては、吾々は前記ミリアの談話以外に永く多く知るところがなかつた。スミスがこの講義を爲すに當つて自ら草稿を用ひたか、或は可成り詳細なノートを準備したであらうことは容易に想像される(W. R. Scott: Adam)。しかしこれ等草稿は總て生前に焼却せられ、「グラスゴウの教授であつた間に於けるスミス氏の講義は、道徳情操論及び國富論で自ら發表した外は、どの部分も保存されて居らない」といふステュアートの言葉が一般に汎く信ぜられた(Essays, p. xv)。然るに彼の歿後約百年この講義の第三及び第四部に當る部分の筆記がエドキウン・キャナンによつて發表された。「法學、すなはち正義、警察、收入、及び軍備に關す」講義の筆記。一七六六年「Juris Prudence or notes from the lectures on justice, police, revenue, and arms delivered in

the University of Glasgow by Adam Smith professor of moral philosophy, 1766 がこれである。この講義筆記が一七六六年に作られたことは標題紙の記載によつて疑ひないが、しかし一七六四年一月に既に彼が教授を辭して居ること、誤字のあるものが明かに耳からでなく目からであること等から、直接學生によつて講堂でとられたものでなく、また當時の蘇蘭學生の境遇と用紙及び装釘とを考へ合せて、レエがその頃人氣教授の講義が學生のノートから轉寫されて店頭で賣られたといふ(J. Rae: Adam)それでないことが明かであり、その表紙に残された藏書票の殘缺からアレキサンダー・マラー Alexander Murray 即ち後のヘンダソン卿が猶ほ Younger を稱した時代に、スミスが教へた學生からノートを借りて書寫せしめたものと考證されて居る(E. Cannan ed.: Lectures on justice, police, revenue and arms delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, reported by a student, in 1763, 1896, p. xvii-xix; W. R. Scott: The manuscript of Adam Smith's Glasgow lectures, in "Economic History Review, Vol. III, 1931-32, p. 91-92; J. Bonar: Catalogue of Adam Smith's library.")。またこの講義が實際に行はれた時期に就いては、發見者キャナンはその内容から「多分アダム・スミスの辭職に先つて一七六三—四年の學年の一部に於いてか或は一七六二—三年の學年に行はれたものである。一七六二—二年以前に行はれたものでないことは殆んど確かであつて、一七六〇—一年以前に行はれたものでないことは絶対に確實である。」(E. Cannan ed.: Lectures, p. xix, xx) スコットは講義の分量からこの筆記は一七六三—四年の不完全な一學年には不可能で、一七六二—三年に取られたものと考へて居る(W. R. Scott: The manuscript of Adam Smith's) 。その正確さは、本講義の各節を國富論の照應部分と對照して一應納得できるのであるが(E. Cannan, p. xxii) 最近その行はれた直後即ち一七六三年夏若しくはその後執筆されたと思はれる國富論の一部の「初期草稿」が発見されて、それが全く異例的に完全なものであること、筆記者がスミスの議論の異數な理解力の持主であり、思想の主眼點を保持しつつこれを遙かに簡潔な形で再現し、しかも麗句警言を取入れることを忘れて居ないことが、一層明か

にされた。しかしこゝに一つ例外がある。それは分配問題に關するものである。分配論はこの講義筆記では殆んど消失に近いまで壓縮されて居る。すなはち「初期草稿」で一八九一語を費して説明されて居るものが、こゝでは三二二語に短縮され、彼の思想の淵源に關し「の問題を投げ掛けて居るのである」(W. R. Scott: Adam Smith, p. 322; E. Scott: Manuscript of an early draft of part) of The Wealth of nations, p. 429)。

この講義筆記はキャナンによつて、彼が在來の英國思想家に承繼いたものと佛蘭西フキジョクラットに學んだものとを區別し、その思想發展の跡を明かにして居る點に價値が認められるものとせらるる。スミスがグラスゴヴに於いてその少年時代教を受けたフランシス・ハチスンが彼に與へた影響は、レエが既に指摘して居るところである(J. Rae: Adam) 。キャナンは講義筆記はこれに「積極的」證明を與へるものとするのである。すなはちハチスンの「道徳學綱要」 Philosophiae moralis institutis compendiaris libris III. ethices et iurisprudentiae naturalis elementa tacontiensis. 1745 (本書は一七四七年英譯された) A short introduction to moral philosophy in three books, containing the elements of ethicks and the law of nature. として出版された) また後には「道徳哲學體系」 A system of moral philosophy, in three books, の取扱ふ問題がスミスの「講義」に現はれるものと殆んど同一であることから「スミスがクレイギイのクラスにする講義を急いで準備せねばならなかつた時に、舊師の講義の自分の筆記に目を通し(彼のやうな立場にある多くの人々が、前にも後にもやつて來たやうに)、エデキンズラから携へて來た自分の講義案の序論及び結論として經濟問題を「纏めてした」と切に推量した」といふのである(Lectures of Adam Smith, ed. by E. Cannan, p. xxxvi, p. xli) 。猶ほこの問題に就いては財政經濟時報第二十七卷九月號小稿「フランシス・ハチスンの經濟學」を参照されたい。またフキジョクラットの影響に就いては、彼は講義筆記と國富論の内容を比較し

て、講義になく國富論に新たに附加へられたものとして、フキジョクラートの學說(第四編最終章)及び宗教と國家との關係を論ずる項(第五編第一章第三部第三節)を挙げ、しかしこれ等の追加は、第二篇にストックまたは資本の理論と生産的及び不生産的勞働の理論を採り入れたこと、第一篇第六章の終りに近く分配理論が價格理論中に忍び込んで居ること、及び年生産の概念を力説することに較ぶれば、その意義は餘り重要でない。「これ等重要なる變更は、言ふまでもなくアダム・スミスが二七六四—二七六六年バックルウ公爵に伴つて佛蘭西を往訪した間に結んだ佛蘭西經濟學者との交友に負ふものであつた」と結論した(W^{ealth of nations}, ed. by Edwin Cannan.)。しかしこれはスミスが二七六三年即ち講義以前に佛蘭西文献に通じなかつたことを前提としなければ言へない言葉である。従つてこの點に關して異論の存すべきことは容易に想像される。すなはちヒッグスはその頃既にフキジョクラートの全學說が世に公にされて居た。(彼はその例の一として一七五五—一七六〇年の「人民の友」Ami des hommes—その中には經濟表がその説明と共に載せられて居る——)を擧げて居る。)スミスがこれを知らなかつたと言ふのは大きな獨斷である。スミスが二七六三年に深く佛蘭西學派の諸原理に染んで居なかつたことは明かであるが、しかしそれは「彼が二七六三年にこれと一致する限り、二七六六年にこれと無關係であつたとする主張を立證するものでない」とする(Henry Higgs: *Lectures on justice, police, revenue, and arms*, by Adam Smith. In "Economic journal", vol. vi, 1896, p. 611.)。而してこれに對しキヤナンは「國富論がスミスの構想中に在つた二七四九年より二七七六年に至る二十七年の間に經濟思想の英吉利海峽を横斷して來往すること幾度、その進歩發達の成果に就いて英佛相互の貢獻如何を争ふが如きは無用であると應酬した(E. Cannan, p. xvii-xviii.)。しかし議論はこれで終結とならないで、前述國富論「初期草稿」の發見を繞つて、猶ほ新たに繼續されることゝなつて居る。これに就いては、私はなほ別の機會に觸れるであらう。

四

一七五九年アダム・スミスは、グラスゴウ大學道德哲學教授としてその主著の「道德情操論」The theory of moral sentiments by Adam Smith, professor of moral philosophy in the University of Glasgow. Printed for A. Millar, in the Strand; and A. Kincaid and J. Bell, in Edinburgh. 1759 を公にした。本書は「經濟學聖典として彼の他の主著「國富論」に捧げられる榮譽の前に光りを失ひ、今日では専門家以外に殆んど聞えるところがない。恐らく一には倫理學の研究が前世紀に於いて別の方向に進み、本書で試みられるやうな經驗的心理的取扱ひが流行らなくなつたに由るものであらう。ヒュームの批評家でカンティアンであつたT・H・グリーンはその「通俗哲學」Popular philosophy in its relations to life で彼とその同情説をあつさり批評し去つて居る。彼に據れば、道德情操と呼ばれるものは「人の習性に作用して行動を決定するに足るほど強くなつた時に吾々が徳と呼ぶ。かの社會的幸福に對する關心の弱し形態」に過ぎない(J. Bonar: *Moral sense*, p. 170; T. H. Green: *Lectures on the principles of political obligation*, new imp. 1917, p. 246.)。しかし當時に在つてはそれは一の倫理學上の標準的著作であつたのであつて、一七六六年レンシングが「ラオコオン」Laokoon, oder über die Grenzen der Malerei und Poesieを書いた時に、賛成してゐるはなないが、「十分理由ある」として、その合宜に關する一節を引いた(Lessings Werke, Bd. III S. 28; Adam Smith.)。また著者自ら三十餘年の後その第六版を上梓した時、「一七五九年の始めとすべし夙い頃に初版を出して以來、綿密な改訂はその「常に志したところであつたと言つて居るところを見れば、スミスによつて本書が國富論よりも「遙かに高く評價された」とす(Edwin Cannan: *Moral sentiments*, 6 ed. 1790, Advertisement, p. iv; Theorie des Her.)。Ausg. von Walter Eckstein, 1926. S. xxiii.)。

前にも述べたやうに、アダム・スミスはこの頃グラスゴウ大學にグレイギイの後を襲つて 恩師ハチスンの講座であつた道徳哲學の講義を擔任して居た。道徳情操論がこの講義を基に發展させ、公刊に適するやう纏め上げたものであることは言ふまでもない。ダッガアド・ステュアートは、本書出版後彼の講義は倫理學に關する部分がつつと簡略にされ、法學及び經濟學原理に關する説明が増加されたと報告して居る(Edwards)。本書に繰返しの多いこともその講義風な特徴を示すものと見て、(J. Bonar: 'Morals', sense, p. 174) ミラアは、教授ほどスミス氏の才能に適したと思はれる地位はなかつた」と追想して居る(Edwards)。道徳哲學教授としての彼の名聲は高まり、たゞ彼の講座に列せんがためグラスゴウに留學するものも少くなく、その講義科目はその地の流行となり、その意見はクラブや文學會の議論の主題となつた(Edwards)。彼の著作に對する、殊に蘇蘭人の期待が大きかつた。一七五九年四月十七日アダム・フアグスは、「この冬は蘇蘭出身の著者に就いて聴くばかりである。こゝ暫時スミスの著書を待ちあぐねて居る。私はミラア・A・ミラア、道徳情操論の出版者)が——貴君は恐らく彼から直接もつと消息を得られるのだらうが——この春の出版に若干疑念をもつて居ると聞くのは残念だ」と書して居る(W. R. Scott: 'Adam')。しかしこの蘇蘭の學者の懸念は實は全く杞憂であつたので、著作そのものは既に四月を俟たないで出版されて居たやうである。スミス自身は「一七五九年の初め」であつたと言ひ(Moral sentiments)、「ホームは同じ年の四月十二日にその贈本に對し謝狀を送つて居る(Essays, p. xlvii; J. Rae: 'Adam Smith', p. 141; J. Y. T.)」。

本書は道徳的是認及び否認が究局に於いて公平にして事情に通じた傍觀者の同情感情の表現に歸着することを主内容とする。「人はどんなに利己的なものと想像されるとしても、その本性の中には彼をして他人の幸運に利害關係を感じしめ、他人の幸福を彼にとつて必要ならしめるある原理のあることが明白である。吾々が他人の困苦を見

るか、或は如實にこれを想像せしめられる場合に、これに對して感ずる憐憫又は測隱の情は即ちこれに屬する。吾々は他人の感ずるところを直接に經驗しないが、自分を他人の境遇に置いて想像することは可能である。吾々は想像によつて吾々自身を彼の境遇に置き、自ら凡て同じ苦痛を忍受するものと考へ、謂はゞ彼の身體に入り込み、ある程度彼と同一人となつて、そこから彼の感覺を推測し、度はこれよりも弱いが、しかし全然違ふのではない或物を感じずる所までもゆく。これが即ち同情である。憐憫及び測隱の情といふのは、他人の悲しみに對する吾々の思ひ遣りを表はすために用ひられる言葉である。同情も恐らくもとは同じ意味であつたのだらうけれども、今や有ゆる感情に對する吾々の思ひ遣りを示すために用ひられていゝ。(1st ed.) 倫理的是否の原理となるものはこの「同情」である。ある人の行爲感情に同情するといふことは、これを道徳的に是認することである。主なる當事者の元の感情が傍觀者の同情感情と完全に諧和する場合には、それは後者にとつて正當且つ適當且つその目的に相當するものとして見える。これに反し自分が相手の身になつたものとして感ずるところと一致しなければ、それは必然に 彼に不當、不適且つこれを惹起した原因に不相當であると見える。(Ibid.)

本書に於いて道徳の原理が同情に求められて居るに對し、國富論に於いては自利心の自由發動が是認推賞されて居ることは、從來屢々問題とせられた。而して「同情はその固有の領域として道徳界をもち、利益が經濟界を支配する」とスミスのその一の解釋(Ch. Rist: 'Histoire des doctrines') また「スミスは會て『同情』を『仁愛』と同視したことがない。……同情は寧ろ利己心と完全に調和する」とするものが他の解釋である(W. Eckstein: 'Theorie der ethischen Gefühle, Bd. I.'). しかし理論の聯絡がどうあるにしても、著者躬らはそれ等を同一體系の部分と考へたことは、情操論「初版終りの一節で、別の一論稿に於いて道徳哲學體系の一部として「法律及び政治の一般原則とその様々の變革」を記述

することを約し(p. 551)。しかも第六版に至つて「諸國民の富の本質と原因に關する研究に於いてこの約束の一部分を果した、尠くも警察收入及び軍備に關する限りに於いては履行した」と述べて居ることによつて明かである(p. 552)。而してその連絡を示すものは、グラスゴウ講義の法學論の一節であらう。そこで彼は、人をして市民社會に入らしむるものに、權威と功利の二原理のあること、「優秀な富がこれ等素質——年齢その他——の孰れよりもより、以上に權威附與の力ある」ことを説いた。これは貧者が富者に頼るところがあるからでない。一般に貧者は自立的であつて、その勞働でやつていく。最下級の勞働者の賃銀でも自活に事欠かない。しかも彼等は、富者から何等利益を期待しないのであるけれども、これに尊敬を拂ふ強い性向をもつて居る。「この原理は道德情操論で充分説明されて居る。そこではこの性向が、吾々と同等若しくは庸劣の者よりも優越者に感ずる同情が大であることから起るものなることが示されて居る。(Lectures) (註)實際吾々は彼の全講義の第三部を構成した「正義論」を中間に置くことによつて、前記兩著の統一が求められるやうに思ふ。「正義の目的は侵害からの保障である。(Lectures) (p. 3. 5.)」自利的行動は正義によつて制約されなければならぬ。正義は彼によりその行政を國家に托された三義務の一である (Wealth of nations, ed. E. Cannan, vol. II, p. 184-85; Glenn R. Morrow: Adam). 洵に敢て道德論と國富論とのみ言 (Smith: moralist and philosopher, p. 166-67. In "Adam Smith, 1776-1926," 1828)。洵に敢て道德論と國富論とのみ言はない。法學論——或は恐らく神學論をも——含め、彼の全思想は、尠くも彼に取つて同一構想の下に於ける一の完全な體系であつたに相違ない。言ふまでもなく彼に部分的に、また全體的に、餘りにも屢々矛盾撞著と思はれる理論が展開されて居ることは事實である。しかし私はスミスのこの問題に觸れる時、彼が社交の際不用意に漏す意見は偶然の事情とその時々々の氣分によつて影響され、「彼の勝れた悟性とその哲學諸原理の不思議な統合から期待されるやうな齊一なものはないが、しかしそこには常に眞理と睿智の閃きがあり、「同一の問題に就いて異なる時に

述べられる意見は、全體綜合すれば恐らく總括的且つ正當な決定をなす資料を提供するであらう」と言つて居るグッガアド・ステュアートの言葉を思ひ出さざるを得ない (Essays)。

(註) 道德情操論、功名心の起原と階級差別に就いてに於いてである。「吾々はその富貴を誇り貧乏を隠すのは、人間が悲しみよりも喜びにより、完全に同情を感じる傾向をもつからである。…富者は、その富が自ら彼に世の視聽を蒐め、また人類は、彼の地位の優越がそんなにも容易く彼に與へるそれ等總ての快適な感情に於いて、彼に追隨する傾向をもつことを感ずるが故に、その富を誇るのである。」富者及び權力者の有ゆる激情に追隨してゆく人類のこの傾向に、階級の差別及び社會秩序の基礎がある。」(1st ed. p. 108-14; 6. ed. p. 120-27.)

後世に對する影響から稽へて、國富論との關聯に於いて最も興味が多いのは、「功利の是認の情操に對する效果」を論ずる第四編の一節であらう。彼はこゝでその富の哲學とでも稱すべきものを開陳して居る。天が憤つて功名心をもつて訪れた「貧民の子は、その周圍を見廻し、富と權力を極めて好ましいものとして憧憬し初め、「終生富と權勢の追求に努める。その結果、彼は老年に入つてこれ等のものを獲得するのであるが、その曉に於いて彼はこれ等のものは眞にその取得に費された犠牲に價せず、また、眞の幸福とも殆んど交渉のないものであることを知るであらう。彼が遂に富及び權勢がつまらぬ效用の裝飾に過ぎず、玩具愛好者の手筈ほどにも肉體の安易、心の平靜の獲得に適せず、またそれと同様にこれ等のものが彼に供する總ての便益が便利であるよりも、これを身につけて居る人にもつと面倒をかけることを覺り始めるのは、その時、その身體が勞苦と病患に蝕ばまれ、その心は、敵の不正または友の忘恩不實によつて蒙つたと考へる許多の被害、失望の思ひ出に傷め亂さるゝ人生最後の餘燼に於いてある」(p. 341.)。彼が富に對し初期に懷いたものは、かゝる蔑視的見解であつた。しかしこの場合にも彼は、人間

の勤勉を絶えず刺戟し活動させて「土地を耕し、都市を建設し、有ゆる技術學問を進歩させ、人生を高尙なもの、美しいものにし、また地球の全面を一變して原始林を快適な沃野とし、前人未到の不毛の海洋を生活の新資源、諸國民間の大道と變じたものは、この欺慢であるから、「自然がこんな風に吾々を欺くのは仕合せといふものだ」と附加して居る (Ibid. p.)。而してこゝに彼が後に國民の富の本質と原因及びその最善の獲得手段の研究に生涯の最も收穫の多い時期を捧げた理由が見出される。

彼はまた續いてこの富の蔑視の見解から、彼の自然的自由論の根底に横はる、眞に經濟的樂天觀の基礎たるものを發展させて居る。彼は何人も知るやうに國富論で、各人が「一の見えぬ手に導かれて、その意圖に存せぬ効果を助成する」ことを言つた (Wealth of nations, ed. E.)。吾々は既に本書に於いて「見えぬ手」に就いて述べられて居るのを見るのである。すなはち巨富の利益といふものは多く幻影に過ぎないが、しかし人間は頑固にそう考へないから、彼等は土地に勞力を加へて「自然的豊度を倍加しより、多數の住民の維持を可能ならしめ、その結果大國民の富と力とに對して適當な基礎を供給した。のみならず、眼は腹よりも大きい」から、大地主は假令冷酷無情であるにしても、「彼の胃腑の收容力はその莫大な願望に比例するものでなく、最も貧しい百姓のそれよりもより、多くを收容れない。」彼自ら消費する少量の生産物を除いては、擧げて「自分では殆んど利用しないものを最もうまい仕方と調理して呉れる人々の間に、僅かしか消費されない宮殿の調度を整へる人々の間に、また貴人の經濟に用ひられる有ゆる種類のがらくたものを供給整理する人々の間に分配せざるを得ない。」その結果大勢の人々が、彼の贅澤と移氣から、その慈善若しくは正義感から期待することの出来なかつたかの生活必需品の分前を引出すことになる。かくして、土地生産物はいつの時代にも殆んどその維持し得るだけの數の住民を維持し、「富者はその「無駄な飽くことを知らない

欲望満足」だけしかを追求しないと云へ、事實に於いて「彼等の有ゆる改善の生産物を、貧民と願け合ふ。」「彼等は見えぬ手に導かれて、土地がその全住民の間に均分されたとしたら、爲されるであらうと同一な生活必需品の分配を行ひ、かくて意圖することなく、また知ることなくして社會の利益を進め、種族増進の手段を提供する」といふのである (Ibid. p.)。そしてこゝに於いて吾々はまた道德情操論と國富論とは 繼兄弟^{スチンブラザー}ではなく、そこに濃き血の繋りあることを示す今一つの證據を加へるのである (An essay by Charles J. Bullock in "The Vanderblue").

五

アダム・スミスは道德情操論の公刊によつて、一躍第一流の著作家に列せられた。グラスゴウ大學當局の言葉を藉れば、「氏の高雅獨創的な道德情操論は、氏をして歐羅巴を通じ文學と教養ある人々の間に尊敬を贏ち得させた」 (Essays, p. iii-iv, J. Rae: Adam Smith, p.)。彼がそれによつて獲た世上の好評は、一七五九年七月十四日 W. ロバートソンが彼に送つた手紙によく現はれて居る。「吾々の友人ジョン・ホームが一昨日倫敦から當地へ到着した。貴君は澤山の人達から『情操論』の好評を聞いて居られると思ふけれども、ホームが齎らした消息をお傳へしない譯にいかない。氏は本書が有ゆる第一流の人々の手に行き亘つて居ると、内容文體二つ乍らの故に多大の賞讃を博して居ること、及びこんな眞面目な主題の書物がこれよりも手篤い仕方と歓迎されるといふことは不可能であることを斷言して居る。貴君がオックスフォードで育たれたと聞くのは——それ故に彼等は貴君に權利がある——英蘭人とつて大きな喜びである。」 (W. R. Scott: Adam Smith, p. 239.)。しかしこれより先四月十二日に贈本の禮狀を兼ねてヒュームが書いた手紙ほど、本書が巷間に博した喝采を傳へて居るものはあるまい。彼はその中で「賢人の王國はその心である。またいつの日か更に求むるところがあるにしても、それは偏見を離れ、彼の事業を究め得る擇ばれた少數人の批判に

外ならないだらう。實際群衆の賞讃ほど強力な誤謬の判断はない。フォーキオンが民衆の喝采を受けた時には、いつも大きな過ちを犯したのでないかと自ら疑つたことは、貴君も御存じの通りである。だから總べてこれ等のことを考慮し、正に貴君に最悪に對する備へあるものと考へて、貴君に貴君の本が極めて不仕合せであつたといふ悲觀的な報道をお傳へする。といふのは世人がそれを極端に賞揚しやうとして居るやうに思はれるからだ。本書は衆愚によつて或るもどかしさを以つて待たれて居る。文人の群は既に賞讃の聲を高々に擧げ始めて居る。三人の監督はこの本を買ふため昨日ミラアを訪ね、著者のことを訊いた。ピエタポロオの監督はその前晩をある仲間と過したが、そこでこの本が世界中の有ゆる書籍以上に稱揚されるのを聞いた」と友人らしい表現で賞めて居る。それは道徳情操論が出て「僅か數週日」の間に認められたのであるが、また出版者ミラアがひどく欣んで「版の三分の二は既に賣れ、成功は疑ひない」と言つたとも書いて居る (Essays, p. xlvii; J. Rae, Adam Smith, p. 143-44)。

エドモンド・バークも本書の讚美者の一人であつた。彼はその書評を「アニュアル・レヂスター」に書いたが、それは次の如く好意に満ちたものであつた。彼はその書評を「アニュアル・レヂスター」に書いたが、それは

「最近道徳上の義務、感覺に就いて澤山書物が書かれた。人々は或はこの問題は總て盡されて居ると思ふかも知れない。しかしこの著者(スミス)は、この問題の考察の新しい、また同時に完全に自然的な道を開拓した。それが他の題目に就いての伶俐な新しさに過ぎないならば、唯々賞めて置いて差支へない。けれども苟しもこと道徳に關しては、これほど危険なことはない。こゝでは理論は、その有ゆる本質的な諸點に於いて正しく、眞理と自由に基礎を置くものと吾々は考へる。著者は吾々の最も普通の、最も承認せらるゝ感情に正義、適正、合宜、適合の基礎を求め、是認及び否認を徳罪の基準とし且つその同情に基礎を置くものなることを説明するに當つて、この單純な眞

理から、恐らく會て出現した最も美しい道徳理論構造の一を打建て、居る。例證は豊富巧妙であつて、著者が異常な觀察者であることを示して居る。彼の言葉は平易淺測で、事を極めて明瞭に諸君の眼前に現出する。それは書物よりも寧ろ繪畫である。」(Annual register, or a view of the history, politics, and literature, for the year 1759. 5th ed. 1769. p. 485.)

本書の書評 同七年七月の「マンズリー・レヴュー」にも現はれた。それはラルフ・グリフキスの筆に成るものであつたが、等しく本書を、罕れに見る敏感さと洞察力を示すものと賞揚した (The monthly review, or literary journal, by several hands Bd. xxi. p. 1-18.)

「道徳情操論」は八折版一卷五五一頁(の形で、倫敦アンドリュウ・ミラアから出版された。A・ミリア (Andrew Millar, 1707-1768) は著作家に理解のあつた蘇蘭出身の出版書肆である。彼は前にジョンソンの英語辭典を出版し、彼から「私はミリアア氏を尊敬する。氏は文學の價値を高めた人です」と感謝されて居る (James Boswell: Johnson, 1892.)。彼にはクムスン、ロバートソン、ヒューム等蘇蘭出の學者の著述の出版が多し (D. Greig: Letters of J. Rae: Adam Smith, p. 141-42.)。スミス傳研究の權威ジョン・レネが本書が初め八折版二巻として出版されたと言つて居るのは、言語起原論が第二版に加へられたと誤まつて居ることと共に、何とも懷疑に堪えない。後者はステュアートが「そう信ずる」と書いて居るのを誤り傳へて居るのであらう (Essays, p. xi.)。

一七五九年七月二十八日のヒュームの手紙は、スミスが直ちに再版の準備に着手したことを傳へて居る。(J. Rae: Smith, p. 145.) しかしそれは一七六一年まで現はれなかつた。この新版の準備に際し、彼は多数の訂正と共に、私の注意を免れて前版に残存する誤植があつたら正して置いて戴きたい。しかし他の點に關しては、お渡した案文に従つて、かなり精確に印刷せられたいと申し送つた。また、自分の妻が不義をはたらいて居らぬのにその貞操を疑ふ夫よりも、自分の妻が不義を働いて居るに拘らずこれを潔白だと信ずる夫の方が餘程仕合せだ」といふ西班牙の諺を面白く引いて、著作者から言つても、自分が正しくて、しかも誤れるものと考へて始終心配して居るものよりも、往々誤りを犯しながら自ら正しいものと信じて居る者の方がすつと幸福である」とも書いて居る(一七六〇年四月四日附書簡。J. Rae: Adam Smith, p. 149.) これは一つには當時出版業者中に著者の承諾を得ないで改竄を加へるものが往々あつたことを懸念して書き送つたのであるが、しかし一面彼の學者としての着目な性格を物語つて居るものでもあらう(高橋誠一郎思想史上の文献に就て「三田」)。この注意にも拘らず第二版に多少の過誤は免れなかつた。一七六〇年十二月三十日に彼はストラアンに宛て、彼の書物の印刷に際して後者が犯した「許すべからざる聖靈に對する罪」に就いて書いた。この手紙はこの版が未だ公刊の運びにはなつて居なかつたかも知れないが、しかし印刷は既に成つて居たことを示して居るやうである(W. R. Scott: Adam, p. 254.)

本版に於ける改訂の主なもの、總べて同情が愉快なものであるならば、悲劇の涙から生れる快感の説明が困難だらうとのヒュームの批評に對し(J. Rae: Adam, p. 145.) 自己の立場を辯護せる一註記(3. ed. p. 76.)^{3. ed. p. 76. 小泉博士前掲書七〇一七頁に引用}及び行動する我と批判する我とを特に明白な言葉で區別して居る第三編の一節であらう(3. ed. p. 202.)^{3. ed. p. 202. 小泉博士前掲書七〇一七頁に引用}とされて居る部分がそれである(W. Eckstein: Engl. Sprach. p. 1037.)

一七六七年に出版された第三版には「言語起源論」 Considerations concerning the first formation of languages and the different genius of original and compounded languages が添付され、標題にその旨を示す言葉が加へられた。スミスは一七四八―九年の冬からエデケンバラで文學講演を行つた。前に述べたエデケンバラ法學講演もその繼續として行はれたのである。彼はこの文學講演で「言語に關する(文法學者として)となく、修辭學者として、單純、雄健その他様々の題目に適する文體の各種類若しくは特徴、文章の各部分の構造、自然的順序、適當な配列等々に關する一聯の優れた講義を行つた。本篇はこの散文の文體分析の序文を成すものと推測されて居る(W. R. Scott: Adam J. Bonar: Moral, p. 202.)^{J. Bonar: Moral, p. 202.}しかし何故にそれが本書に添付されたのか。本版の著者名から稱號を省き、單に「アダム・スミス」とされて居ること共に、特に著者の指令に據つたものであるが、その理由がわからなく(J. Rae: Adam, p. 234.)^{J. Rae: Adam, p. 234.} 第四版は一七七四年に上梓され、始めて標題に「即ち、人々が以て先づその隣人の、次いで彼等自身の行爲と性格に關して自然に判斷を下すべき原理の分析に關する一論」 An essay towards an analysis of the principles by which men naturally judge concerning the conduct and character, first of their neighbours, and afterwards of themselves の副題が添加された。また本版から出版者がストラアンに替へられた。第五版は一七八一年の出版である。第四版には重要な變更改が追加されたが、第五版は全く前版通りである(W. Eckstein, p. xxxviii.)^{W. Eckstein, p. xxxviii.} 第六版は一七九〇年に出された。スミスはこの年の七月十七日に逝いたのであるから、この版は著者生前の最後の版本である。而してグラスゴウ大學に蔵せられる本版の一部には、その見返しにスミスの定まらない手蹟で大きく、尊敬するアーチバルト・プリンス氏 著者より」と獻辭が記され、彼が生前に本版の公刊を見て居る事實を證明して居る(J. Bonar: A catalogue of the library of Adam, p. 169; cf. Essays, lxxxix.)^{J. Bonar: A catalogue of the library of Adam, p. 169; cf. Essays, lxxxix.} しかし本版は著者生前最後の版本であるといふわけでは

く、著者の死直前に出版され、その改訂は著者の學問上に於ける最後の業績、その思想の最も圓熟した最終の收獲である點に於いて重要である。彼はその勞のためさなきだに衰へた健康を害したほどであつた。彼は一七八九年三月三十一日カデル——本版から本書の出版者の一人に加つた——に宛て、「私は前便以來御申越の道德情操論新版の準備にいたく勞したので、健康を害しさへし、主として休養とすつと樂な仕事に就くため、こゝ數日中に税關の常務に立ち歸ることを餘儀なくされて居る」と書して居る(W. R. Scott: Adam)。

彼は本版で最も重要な改訂を行つた。一方に於いて若干の削除を施すと共に、他方では可なり進んだ訂正増補を行つた。主なる改訂は第一篇第三部最終章、第三篇の最初の四章、第六、第七篇に加へられた。第六篇「徳論」は本版に於いて全然新たに加へられたものであつて、第七篇では、從來諸章に散在したストア哲學に關する章句の大半を一箇處に纏め、且つ從來よりも詳細充分に説明せんとし、同じ篇の最後の章では、義務及び正直の原理に關する若干の義論が附加へられた^(6. ed. Advertisement.)。その結果紙數は可成り膨脹したので、本書は本版に至つて上下二卷(四八八頁及び四六二頁)に分冊せられ、價格も初版より第五版まで六志であつたのが、ボール表紙で十二志に改められた。これ等の價格は國富論各版裏表紙見返しに記載されて居る。

本版出版の際カデルは、これは我國にその慣習のないことであるが、同様の場合に増補分の別冊を刷らなかつたことを一再ならず非難されたといふので、その發賣を希望したが、スミスは「本書の性質」がそれを許さないとこれを許可しなかつた。この處置は書物の賣行を離れて、彼の學者的良心がそうさせたのだと解せられて居る(J. Rae: Smith. p. 425-26; J. Borar: Catalogue. 1.)。

本書は慶應義塾圖書館藏書に據れば、版數を數へられて居るものは、一八〇九年第十二版(グラスゴウ、チャムマ

ン版)まで出て居る。また異版は國富論ほど多數に行はれて居ないが、倫敦版(ポーン標準文庫もその一である)、エディンバラ版、グブリン版、瑞西(バーゼル版)、アメリカ版等相當行はれて居るやうである。本書は一七六四年匿名の譯者によつて佛蘭西語に移された。「心情形而上學」(Métaphysique de l'ame: ou, théorie des sentimens moraux, tr. de l'anglois de m. Adam Smith... par M. * * * Paris, 1764)がこれである。譯者は匿されて居るが、ホルバック男の示唆によりマルク・アントアンヌ・エイドウス Mare-Antoine Eidous が試みたものであると言ふ(J. Rae: Adam Smith p. 196)。

この譯はあまりいいものでなかつたから、彼の著書に對する讀書熱がこれによつて(小泉博士前掲書、八四頁)。

高められたとは思はれないが、彼がバックルウ公爵に伴つて佛蘭西に渡つた頃は、この國の啓蒙運動の最盛期で、哲學者は「巴里の王」とさへ言はれた時代であつたから、本書は文字ある人々に原文で讀まれ、數人によつて翻譯が考慮された。そして一七七四年にブラヴェによつて原著第三版からの翻譯 Théorie des sentimens moraux; tr. nouvelle de l'anglois de M. Adam Smith... Avec une table raisonnée des matières contenues dans l'ouvrage, par M. l'abbé Blavet. Paris. が出された。此翻譯の存在をブフェル伯爵夫人から知らされた時、スミスは此夫人に宛てて「私が價する以上に其國で評價されることを最も好まない國民の言葉に、私の著作(道德情操論)がそんな風に翻譯されるのを見るのは、私の大きな恥とするところであつた。貴女の寛容な親切は、私にこの苦痛を與へると共に、文人に寄せ得る最大の好意を示されたことになる。貴女が望まれるのだから私はその翻譯が讀んで見たい。若しもそれが可なり好奇心を唆らないものであるならば、拙著譯出の光榮を與へられた人の名を知りたい」と書いて居る(Recherches sur richness des nations. Tr. par le citoyen)。

本譯はその後譯者からスミスに贈られたらしい。「スミス文庫目録」A catalogue of Blavet 1800. Préface. p. xxiv)。

そしてブラヴェは the library of Adam Smith, ed. by J. Borar. 中にその贈呈本が收録された居る(1. ed. p. 106)。

別の機會に、スミスがこれに對して「私は私の處女作の貴君の翻譯にひどく満足し居ると書いたと引用して居るのであるけれども(Recherches sur richness des nations. Tr. par le)」。しかしステュアートは、スミスが「道徳

情操論が國富論が出るまで佛蘭西でもあまり注意を惹かなかつたのは、「一部はアダム・スミスの翻譯のせうだ」として、と傳へて居る(D. Stewart: Works.)。またラ・ロシヨフコウ公がブラヴェ以前から翻譯に着手し、プランフェルウヅエル伯爵夫人はその計畫を友人に漏らしたと言はれるが、何れも實現しなかつた(J. Rae: Adam Smith.)。この外「デュルゴイ氏」と稱せらるゝ人によつても試みられたやうである(Recherche, tr. par Blavet 1800 p. xxv.)。一七九八年に第三の佛蘭西譯が出た。コンドルセー未亡人、グルシー夫人の Théorie des sentimens moraux ou essai analytique sur les principes des jugemensque portent naturellement les hommes d'abord sur les actions des autres, et ensuite sur leurs propres actions: suivi d'une dissertation sur l'origine des langues par Adam Smith, traduit de l'anglois sur la septième et dernière édition par S. Gronchy... Elle y a joint huit lettres sur la Sympathie. Paris がこれであつて、クローゼンはこれを忠實、流暢だと評して居る(Théorie, tr. par Mme S. de Gronchy 1860. p. xii.)。この翻譯は一八三〇年及び三八年に版を重ねられ(兩版共再版と印刷されて居る)、一八六〇年にH. ボオドリプールの緒言を附してギヨウマンから新版が出された。獨逸では一七七〇年に第三版によるラウテンベルク Chr. G. Rautenberg の Theorie der moralischen Empfindungen von Adam Smith. Nach der dritten Englischen Ausgabe uebersetzt. Braunschweig. が譯者匿名で、一七九一―九五年にコオゼガルテンの Theorie der sittlichen Gefühl. Übersetzt, vorgeordnet, und hin und wider kommentirt von Ludwig Theobul Kosegarten. Leipzig. が出版された。後者は第一巻は四または五版から、第二巻は第六版から譯出された。また近く一九二六年にウオルクア・エックスタイン Walther Eckstein がその優れた解説を附して Theorie der ethischen Gefühleを出した。その外の國では露西亞にベシコフの Teoria nraŭstvennykh čuvstv. 1868 がある。本書には邦譯はなし。私はこゝで遂に彼の名著「國富論」を取扱ふべき時に來た。しかし既に餘りにも彼の前半生の業績に就いて筆を費し過ぎた。私は更に別の機會に本稿を續けたいと思ふ。

南三井家交通記録集

野村兼太郎

徳川時代の旅行がどんな状態であつたかについて、今日とは全く違つて今となつては想像にも及ばぬやうなことが多い。「旅は道づれ世は情け」といひ、「可愛い子に旅させろ」といひ、旅は憂きもの辛いものと考へてゐた。江戸から京大坂に行くのは勿論、鎌倉、大山あたりに出かけるのさへ相當の旅行であつた。況んや仙臺、それから奥へかけての旅は大旅行であつた。旅は世間を知る修業の方法でもあつた。

かうした時代に旅に依つて得らるゝ知識や經驗は相當大であつたらうと思はれるのに、案外それらの知識や感銘を後に遺してゐる旅日記の少ないのはどうしたわけか。美文を連ねて景色を賞したり、案内記のやうな名勝古蹟の記述は多いが、旅の實感がにじみ出るやうな旅行記は極めて少ない。自己の經驗を赤裸裸に語ることをむしろ恥とした時代の風に禍されたこともあらう。又旅宿についても落ついて感想を整理し得ないほど交通宿泊の設備も出来てゐなかつたがためであらう。旅の費用を詳細に記述したものさへあまり多くはない。ところどころに思出したやうに費用を記してゐるが、全體でどのくらゐかゝつたのか、各地での金錢の相場はどうだつたか、あまり明記し